

幼稚園・保育園年長児向けのプログラム"自分のからだを知ろう"に対する評価指標の検討

著者	大久保 暢子, 松谷 美和子, 田代 順子, 岩辺 京子, 今井 敏子, 後藤 桂子, 菱沼 典子, 佐居 由美, 白木 和夫, 中山 久子, 有森 直子, 森 明子, 石本 亜希子, 瀬戸山 陽子, 三森 寧子, 印東 桂子, 村松 純子, 山崎 好美
雑誌名	聖路加看護大学紀要
号	34
ページ	36-45
発行年	2008-03
URL	http://hdl.handle.net/10285/1315



報告

幼稚園・保育園年長児向けのプログラム “自分のからだを知ろう”に対する評価指標の検討

大久保暢子 ¹⁾	松谷美和子 ²⁾	田代 順子 ³⁾
岩辺 京子 ⁴⁾	今井 敏子 ⁵⁾	後藤 桂子 ⁶⁾
菱沼 典子 ¹⁾	佐居 由美 ¹⁾	白木 和夫 ⁷⁾
中山 久子 ⁸⁾	有森 直子 ⁹⁾	森 明子 ⁹⁾
石本亜希子 ¹⁾	瀬戸山陽子 ¹⁰⁾	三森 寧子 ¹¹⁾
印東 桂子 ¹¹⁾	村松 純子 ¹²⁾	山崎 好美 ¹³⁾

Examining the Outcome Measures of the Program for Preschool Age Children "Knowing Our Body"

Nobuko OKUBO, RN, PhD ¹⁾	Miwako MATSUTANI, RN, PhD ²⁾	Junko TASHIRO, RN, PhD ³⁾
Kyoko IWANABE, RN ⁴⁾	Toshiko IMAI, RN ⁵⁾	Katsura GOTOH, RN ⁶⁾
Michiko HISHINUMA, RN, MS ¹⁾	Yumi SAKYO, RN, MN ¹⁾	Kazuo SHIRAKI, MD, PhD ⁷⁾
Hisako NAKAYAMA, RN, MA ⁸⁾	Naoko ARIMORI, RN, PhD ⁹⁾	Akiko MORI, RN, PhD ⁹⁾
Akiko ISHIMOTO, RN ¹⁾	Yohko SETOYAMA, RN ¹⁰⁾	Yasuko MITSUMORI, RN ¹¹⁾
Keiko INDOH, RN ¹¹⁾	Junko MURAMATSU ¹²⁾	Yoshimi YAMAZAKI, RN, MN ¹³⁾

[Abstract]

The purpose of this research is to examine the outcome measures of the program for preschool age children called, "Knowing Our Body," and to present an OUTCOME model. The research method involved visiting preschools and kindergartens and sharing knowledge about 7 body systems (the digestive system, the respiratory system, the urinary system, the circulatory system, the musculoskeletal system, the nervous system, and the reproductive system) with 5- and 6- year olds using a picture story show, a t-shirt depicting organs, and a picture book. The children's parents were then asked to complete a questionnaire concerning their thoughts on the program and knowledge about the body. The contents were then categorized, and from those categories an OUTCOME model was constructed. A comparison was then carried out with a hypothetical model.

This research was approved by the Research Ethics Review Board, and ethical considerations included assuring participation by free will and data confidentiality when the program was implemented and the questionnaire was handed out.

Categories were extracted from both the preschool age children and their parents, and an OUTCOME model was created. The OUTCOME model contents roughly supported the hypothetical model, but some issues remained

-
- 1) 聖路加看護大学 基礎看護学 St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
 - 2) 聖路加看護大学 看護教育学 St. Luke's College of Nursing, Nursing Education
 - 3) 聖路加看護大学 国際看護学 St. Luke's College of Nursing, International Nursing
 - 4) 聖路加看護大学 非常勤講師 St. Luke's College of Nursing, School Nurse
 - 5) 東洋英和女学院小学部養護教諭 Toyo Eiwa Primary School, School Nurse
 - 6) 聖路加看護大学 COE 研究員 St. Luke's College of Nursing, COE Program Researcher
 - 7) 聖路加看護大学大学院, 病態生理学, 小児科学 St. Luke's College of Nursing, Pathologic Physiology and Pediatrics
 - 8) 聖路加看護大学 健康管理室保健師 St. Luke's College of Nursing, School Nurse
 - 9) 聖路加看護大学 母性看護学 St. Luke's College of Nursing, Maternal Nursing & Midwifery
 - 10) 東京大学大学院博士前期課程 Tokyo University, Master Course
 - 11) 聖路加看護大学大学院博士前期課程 St. Luke's College of Nursing, Master Course
 - 12) BABY in ME Baby in Me "Baby in Me" is the private activity for pregnant women
 - 13) 前聖路加看護大学 Former St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing

such as the relationship of the model variables and the selection of measurement tools based on the variables. In the future, it is necessary to supplement those with follow-up research, and refine the model to approximate the phenomenon.

[Key words] people-centered care, preschooler, knowing our body, outcome measure, outcome model

[要 旨]

本研究の目的は、幼稚園・保育園年長児を対象としたプログラム“自分のからだを知ろう”に対する評価指標を検討し、OUTCOMEモデルを提示することである。研究方法は、からだの知識7系統（消化器，呼吸器，泌尿器，循環器，筋骨格，神経，生殖器）で構成されている紙芝居，臓器Tシャツ，絵本を幼稚園・保育園の年長児に行い，保護者にプログラムの感想とからだの知識に関するアンケート調査を行い，その内容をカテゴリー化した。さらにカテゴリーでOUTCOMEモデルを作成し，仮説モデルと比較検討を行った。倫理的配慮は，研究倫理審査委員会で承認を得ると共に，プログラム実施時およびアンケート配布時に研究参加の自由意思，データの守秘等を考慮した。結果，幼稚園・保育園年長児の子ども側とその親側の両側面からカテゴリーが抽出でき，OUTCOMEモデルが作成できた。OUTCOMEモデルは仮説モデルの内容をおおよそ支持できる内容であったが，モデル内の変数間の関係性や，変数に準じた測定道具の選定など課題も残った。今後，追研究でそれらを補い，事象に近づくモデルに精錬していく必要がある。

[キーワード] 市民主導，幼稚園・保育園年長児，からだを知る，評価指標，OUTCOMEモデル

I. 序 論

科学技術や情報システムが飛躍的な進歩をとげている21世紀，健康情報も多種にわたり膨大である。このような中，市民一人ひとりが固有のライフスタイルで最良の健康を創り出すには，莫大な健康情報を理解し，選択する能力が必要になってくる。

自分のからだを知ろうプロジェクトは，市民が主体的に健康情報を理解，選択し，健康的な行動へと繋げていくには，からだに関する基本的な知識をもつことが重要と考えている。次世代を担う子どもたちが健康の基本であるからだの知識を習得することによって，からだやいのちの大切さを知り，主体的に健康生活を創っていきける市民に成長することを目指している。

過去3年に渡るプロジェクト活動と研究結果から，からだの知識を習得する対象は，幼稚園・保育園年長児が最適であること，また学習方法は，日常生活で経験している内容を導入に用い，1テーマにつき15分程度，親も参加できる内容が妥当であると分かっている^{1), 2)}。これらの内容を踏まえ，からだの絵本等の教材を作製，試行と修正を重ねた結果³⁾⁻⁵⁾，プログラム「自分のからだを知ろう」が完成し，評価研究を行う段階にきている。

本研究は，プログラム「自分のからだを知ろう」の評価を行うための評価指標を抽出するため，アンケート結果をもとに分析を行い，OUTCOMEモデルを作成し，プロジェクト開始時に提示した仮説モデルとの比較を行ったものである。

II. 研究目的

研究目的は幼稚園・保育園年長児を対象としたプログラム「自分のからだを知ろう」に対する評価指標を検討し，OUTCOMEモデルを提示することである。

III. 研究方法

プログラム「自分のからだを知ろう」は，からだの知識7系統（消化器，呼吸器，泌尿器，循環器，筋骨格，神経，生殖器）から構成され，紙芝居，臓器Tシャツ，絵本を用いて行うもので，プログラムを保育園・幼稚園で受けた後，7系統の絵本を自宅に持ち帰り，家族と共に学ぶ内容となっている。本研究では，7系統のうち消化器の教育内容を実施し評価を行った際のデータをもとにした³⁾。消化器系プログラム実施後，保護者に子どもの反応や言動の変化に関する記述式アンケートを配布し，そこに記述された肯定的内容をデータとし，データの切片化，ラベル化，カテゴリー化を行った。さらにカテゴリーを評価指標としてOUTCOMEモデルを作成し，仮説モデルとの比較を行った。なお，データの切片化を「」，ラベル化を「」，カテゴリー化を【】で表した。OUTCOMEモデルは，ラベル化，カテゴリー化した内容を使用し，Z変数（属性変数），X変数（独立変数），Y変数（従属変数）の評価指標に分類し，時間の流れを留意しながら矢印を用いて提示した。実線の矢印は，評価指標間の関係性が明確であることを表し，点線

の矢印は現時点で不明確なものを指している。さらにZ, Y変数については、下位項目を で囲み、下位項目を具体的に測定する評価項目を , 評価項目を具体的に測定する用具を で囲み、表現した。

IV. 仮説モデルの内容

プロジェクト開始時、以下の内容を仮説として想定した。

幼稚園・保育園年長児が、プログラム「自分のからだを知ろう」に参加することで、自分のからだの働き、つくりを知り、その見事さを感じる。からだの働きやつくりの見事さを感じることで、人のからだをむやみに殴ったり、乱暴に扱うことがなく、命を大切にようになる。さらに日常生活をからだの仕組みに基づいて工夫して過ごすことで健康生活を創り上げていくことができると考えた。またからだの働き、つくりを知ることで、病気になったとき、異常を生じた臓器のことが分かり、その異常によって生ずる症状を理解し、医療者が説明する治療法を理解した上で選択し、主体的な療養生活を送るための基盤になると考え、からだを知ることによる市民主導型の健康生成モデルとして仮説を立てた(図1)¹⁾。

V. 倫理的配慮

消化器系プログラム実施時及びアンケート配布時において、研究参加への自由意思の尊重、データの守秘と匿名性の保持等を考慮し、所属施設の研究倫理審査委員会にて承認を得た(承認番号05-047)。

VI. 結果

1. 対象の背景とアンケートの概要

対象は、保育園、幼稚園の計2施設に通園する年長児40名の保護者で、36名からアンケートの回収をした(回収率90%、有効回答率100%)。保護者はすべて母親で、質問の対象となった児は、5歳児7名、6歳児が29名、男児は11名(31%)であった。アンケート内容は、プログラムを受けた後、子どもが興味を示した内容、保護者に話した内容、からだを大切にしようという気持ちが芽生えたか否か、芽生えたなら、それはどのような内容か、プログラムについての意見と感想等の計7設問の構成で、保護者が回答する内容であった。

2. 子ども側のカテゴリー(評価指標)の抽出と命名までのプロセス

データの切片化とラベル化を行う中で、子ども側の内容と親側の内容が抽出できたため、子ども側と親側のカ

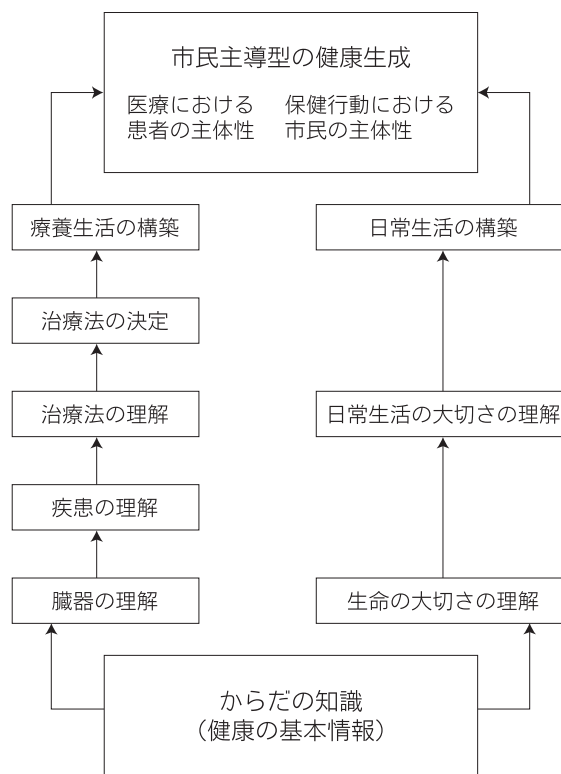


図1 からだを知ることによる市民主導型の健康生成モデル

テゴリー化を行った。

子ども側のカテゴリーは、【からだの仕組みの理解】【からだへの興味、関心の深まり】【日常生活の大切さの理解】【健康を守る日常生活行動の構築】【からだの大切さの理解】があがった。

【からだの仕組みの理解】については、臓器の名前が言える 臓器の働きが言える 臓器の位置が言える の3ラベルから構成された(表1)。

臓器の名前が言える は、「おなかと言っていたのに胃や腸と言うようになった」「くねくねした所を小腸と話してくれた」「ウンチは大腸を通るけど、その前に胃と小腸を通ると教えてくれた」等から構成され、臓器の働きが言える は、「大腸でうんちになるんだよ」「小腸の壁がヒダ状になっていて栄養を吸収するんだよ」「ドキドキって思うと、心臓がギュッとなるんだって」等から構成された。臓器の位置が言える は、「ここが胃でねえ」「食べたものがお腹の“ここ”でウンチに変身するんだ」「母親のからだの部分の指差して、食道、胃、小腸、大腸と説明してくれた」等から抽出できた。

【からだへの興味、関心の深まり】については、教わったことを家族に報告する様子 からだの働きのすごさ、不思議さに興味を持つ 繰り返し教材を見る 繰り返しからだのことを話す 子ども同士で知っていることを言い合う 家族にからだの仕組みの理解を説明してくれる もっと知りたいと思う の7ラベルが

表1 子ども側の評価軸【からだの仕組みの理解】に関するラベルと生データの切片

カテゴリー化 (評価軸)	ラベル化	生データの切片化
からだの仕組みの理解	臓器の名前が言える	おなかと言っていたのも胃や腸と言うようになった。
		ウンチは大腸を通るけど、その前に胃と小腸を通ると教えてくれた。
		「くねくねしたところ」を「しょうちょう」と感動して話してくれた。
		子どもから「胃、小腸、大腸」という言葉を聞くとは思いませんでした。
		小腸が子ども3人分の長さで話していた。
		「小腸は私が3人繋がったくらいの長さ」と話す。
		母親に小腸トンネル、大腸トンネルときちんと名前を行って話が出来ていた。
	臓器の働きが言える	ここは胃でねえと話してくれる。
		大腸でうんちになるんだよ。
		「ドキドキって思うと、心臓がキュッとなるんだって」と話す。
		「小腸の壁がひだ状になっていて栄養を吸収する」ということ。
		「食道が広がったり、狭くなったりすることや、胃に食べ物が入るとお水(胃液)がたくさん出ることを話してくれた。
		「食べ物がクルと、細い道が膨らんで、通るとまたもとに戻る。ウンチになるまで1.5日かかる。胃からどろどろの液が出てくる」という話をしてくれた。
		食道が伸び縮みして食べ物を送ること。
		話の内容を自分の字にして書いて再現していた。
		胃で食べ物が溶ける。
		「小腸がとても長くリンゴが溶けていくんだよ」と話していた。
	臓器の位置が言える	「食物は口の中からどこに行くか知ってる?のどを通して、胃のプールに入って、そこで溶けて、くねくねしたところを通ってうんちになるんだよ」と話してくれた。
		「食べ物が胃で溶けて、腸で栄養や水が血の中に吸われて、水がなくなるから、固まってウンチになるんだよ。1日半もかかるんだよ」と話してくれた。
		ここは胃でねえ。
	母親のからだを見て、食道、胃、小腸、大腸と説明してくれた。	
	食べたものが、お腹の“ここ”でウンチに、変身していると喜んでた。	
	帰り道に胃を指差したり、腸を指差しながら、身振り手振りで絵本の内容を話してくれた。	
	食道、胃、小腸、大腸に流れていく。	

ら構成された(表2)。

教わったことを家族に報告する様子 は、「母親と姉に楽しそうに説明していた」「母親に大喜びで話してくれた」「母と父に得意げに話していた」等から構成され、からだの働きの見事さ、不思議に興味をもつ に関しては、「自分のお腹の中に長い腸が入っていることがすごい」「食べものがウンチに変化することが感動」「からだってすごい」から抽出された。

繰り返し教材を見る については、「繰り返し読んでいた」「寝るまで絵本を離さず、何度も読んでいた」等から抽出され、繰り返しからだのことを話す では、「小腸は、3人分の長さがあることを何度も繰り返し話していた」「何度も話してくれた」から抽出できた。子ども同士で知っていることを言い合う は、「子供同士で集まり、この絵本で知っていることを言い合っていた」「絵本に皆が集まり、内容を伝え合っていた」から構成され、家族にからだの仕組みを説明してくれる に関しては、「母親に「胃ぶくる公園」の話をしてくれた」「母親と兄に腎臓が2つあることを教えてくれた」「家族に小腸の長さを説明してくれた」から構成された。

もっと知りたいと思う については、「怪我をした

時のからだの仕組みをもっと知りたいと言っていた」「軟らかいウンチと硬いウンチがなぜあるのか疑問に思っていた」「色々からだのことを質問する」から抽出できた。

【日常生活の大切さの理解】に関しては、食べることの大切さの理解 排泄することの大切さの理解 の2ラベルから構成されていた(表3)。

食べることの大切さの理解 は、「苦手なものを食べなくちゃと言って朝食を食べていた」「良く噛んで良いウンチをしたい」「食べ物がからだの栄養になるんだ」「食べ物がからだを大きくしたり、元気のもとになる」といった内容から抽出された。この「食べることの大切さの理解」のラベルは、データの切片を見ると『嫌いなものでも食べること』『食べ物を良く噛むこと』『栄養を取ることの大切さ』といった食べることの大切さの核となる重要な要素が含まれていると解釈できた。

排泄することの大切さの理解 は、「いろんな食べ物を食べて良いウンチを出したい」「これからは出たウンチを良く見るよ」「ウンチを今日はまだしていない!」「ウンチは大切なものなんだ」といった内容から構成されているが、食べることの大切さ と同様、データの

表2 子ども側の評価軸【からだへの興味、関心の深まり】に関するラベル化と生データの切片

カテゴリー化 (評価軸)	ラベル化	生データの切片化
(子どもの) からだへの興 味、関心の深 まり	教わったこと を家族に報告 する様子	母親と姉に楽しそうに説明していた。 次から次へと教わったことを教えて(クイズ形式で)くれ、楽しかったようです。 嬉しそうに話してくれた。 喜んでおりました。 母と父に得意そうな顔で話していました。 リンゴを食べるとなくなるんだよと目を丸くして話す。 どうしてあんな色や形のウンチが出来るのかと思っていただけによくわかったと満足そうに、好奇心の満たされた笑顔。 「りんごがウンチになるまでのお話を聞いたよ」と母親に話す。 「たくさんの先生が来て、腸のお話をしてくださった」と両親に話した。 「からだ元気になるためにごはんを食べるんだよ」と父親に話しておりました。 母親に胃ぶくろ公園の話をしてくれた。 母親に今日のからだのことを話していた。 帰りの道で母親に説明していた。
	からだの働き のすごさ、不 思議に興味を もつ	自分のお腹の中に長い腸が納まっていることをすごいことだと感じていた。 食べたものがそのまま体の栄養になることに興味をもった。 食べた物がウンチに変化することが感動。 からだってすごいすごい。
	繰り返し教材 を見る	繰り返し読みました。 塗り絵を塗りながら、話してくれた。 寝るまで絵本を離さず、枕元に置いて寝ていた。 とても嬉しそうに寝るまで話さず、何度も読んでいた。 内臓の絵が描いてある所を随分長く眺めておりました。 ずっと見ていました
	繰り返しから だのことを話 す	「ドキドキって思うと心臓のハートがきゅっとなるんだって」と何回も話しておりました 小腸は3人分の長さがあることを何度も繰り返し話していた。 何度も話してくれました。
	子供同士で 知っているこ とを言い合う	絵本に皆が集まり、内容を伝え合っていた。 子どもたち同士で集まり、この絵本で知っていることを言い合っていた。
	家族にからだ の仕組みを説 明してくれる	母親に胃ぶくろ公園の話をしてくれた。 母親に小腸がとても長く、りんごがとけていくんだよと話していた。 母親に小腸は私が3人繋がったくらい長いよと話す。 「食べ物のがどを通り、今、どこにあるか、通っているか」を話してくれた。 母親と兄にうんちになって出てくるまでにどのくらいの時間がかかるかも話してくれた。 母親に食べ物体がなかでどういう場所にどれくらいの時間いてどんなことがあってから排泄されていくかをきちんと説明してくれた。 母親にうんちは長い管を通るのよ、その前に大きな胃のプールを通るのよとはなしてくれた。 良いウンチと悪いウンチの話をしていた。 これは一日と半日前に食べた物なんだよと話してくれました。 「食物は口の中からどこに行くか知ってる?のどを通過して、胃のプールに入って、そこで解けて、くねくねしたところを通過してうんちになるんだよ」と話してくれた。 母親に食道・胃・小腸・大腸の働きについて説明してくれた。 母親と兄に食道・胃・小腸・大腸の流れを説明してくれた。 母親にうんちの出る体操をしてくれた。 母親と兄に腎臓も2つあると言っていた。
	もっと知りた いと思う	からだについて更に知りたがっている。 お腹が痛くなったときやケガをしたときのからだの仕組みを知りたがっていた。 母親に「べとべとになったりんごはどうやって固いウンチになるんだろう?」と自分で疑問を持ち知りたいたいと言っていました。 家族みんなに食べ物うんちになるまでの流れを自分の言葉で説明し、それが事実が聞いていた。 私に色々質問していました。

表3 子ども側の評価軸【日常生活の大切さの理解】に関するラベル化と生データの切片

カテゴリー化 (評価軸)	ラベル化	生データの切片化
日常生活の大切さの理解	「食べること」の大切さの理解 「嫌いな物でも食べること」の認識	「苦手なものでも食べなくちゃ行って朝食を食べていた。」
		朝食の折、いつもだと目新しいものには手を出さない子が、「何でもたべてみなくちゃね！ いろいろんちができないんだよね！」と自らすすんで食べていました。(うちの子はすごい偏食です!!)
		いいウンチを出すためにはいろいろな食べ物を楽しく食べなければならないということ。
		「何でもチャレンジして食べなくちゃいけないんだよね。」
	「食べることを良く噛むこと」の認識	良く噛んで、良いウンチをしたい。
		食事をゆっくり食べること。
		「食べ物を良くかんで“いいウンチ”をしたい」と子どもが話していた。
	「食べることの大切さ」を認識	食事をとることの大切さを認識したので。
		食べることの大切さ。
	「栄養を取ることの大切さ」の認識	口から入る栄養の大切さが体感できた。
		食べ物は体に栄養を渡しているということ。
		食べ物が体の栄養になるんだ。
「食べ物は元気のもとになる」の認識	食べ物はからだを大きくしたり、元気のもとになる。	
	食物が健康につながると感じた。	
「排泄をする」大切さの理解	「良いウンチをつくること」の認識	いろいろな食べ物を食べて、良いウンチを出したい。
		良いウンチを作ろうという気持ちが芽生えた。
		「いいウンチを作りたい」と言っている。
	「出たウンチを良く見ること」の認識	朝食の折、いつもだと目新しいものには手を出さない子が、「何でもたべてみなくちゃね！ いろいろんちができないんだよね！」と自らすすんで食べていました。(うちの子はすごい偏食です!!)
		これからは出たウンチをよく見るよ。
	「毎日ウンチを出すこと」の認識	ウンチを今日はまだしていない！
うんちは汚いものでなく、とても大切なものだからいっぱい食べて、毎日便を出す方がいい。		
「ウンチは汚いものではなく、大切なもの」という認識	うんちは大切なものなんだ。	

表4 子ども側の評価軸【健康を守る日常生活行動の構築】に関するラベル化と生データの切片

カテゴリー化 (評価軸)	ラベル化	生データの切片化	
健康を守る日常生活行動の構築	「食べる」日常生活行動	野菜を食べると元気になるというお話が印象的だったようで、夕食時の野菜スープをたくさんおかわりしていた。	
		食事の時、野菜から食べ始めました。	
		いろいろな食べ物を楽しく食べる。	
		栄養のあるものをバランスよく食べる。	
	よく噛んで食べる	翌日のお弁当は、よく噛んで食べたらしい。	
		お食事をよく噛んで食べていた。	
	ゆっくり食べる	食事をゆっくりするようになった。	
	「排泄する」日常生活行動	ウンチを出す	ウンチをがんばって出すようになった。
			今日はまだウンチが出ていないと気にする。
		ウンチの色や形を確認する	「大変な旅行をありがとう！」と言ってウンチを良く見て、声掛けをしていた。
兄と一緒にウンチを良く見ている。			
自分がトイレ(大便)をした後、よく見ているようになり、ウンチの色や形を良く見ている。			

切片を見ると、『良いウンチを作ること』『出たウンチを見ること』『毎日ウンチを出すこと』『ウンチは汚いだけでなく大切なもの』という重要な要素が含まれていると分析できた。

【健康を守る日常生活行動の構築】については、食

べるという日常生活行動 と 排泄するという日常生活行動 の2ラベルから構成されていた(表4)。食べるという日常生活行動 は、「いろいろな食べ物を楽しく食べる」や「栄養のあるものをバランスよく食べる」の内容から抽出され、排泄するという日常生活行動 は、

表5 子ども側の評価軸【からだの大切さの理解】に関するラベル化と生データの切片

カテゴリー化 (評価軸)	ラベル化	生データの切片化
からだの大切 さの理解	自分の体を大切にする	幼い子ながらに知識を得ることで、自分の体を大切にしようとする。
	他人のからだも大切に する	暴力的な行動に対してからだの中の構造を知ってもらうことは小さい時代に伝えたい。

表6 親側の評価軸【からだへの興味、関心の深まり】に関するラベル化と生データの切片

カテゴリー化 (評価軸)	ラベル化	生データの切片化
からだへの興 味・関心への 深まり	子どもとからだの話を する機会が増える	「苦手なものでも栄養になるから食べなくちゃね」と話すのがんばって食べなくちゃと話していた。
		分かっていても子どもに説明する機会がないので、良い機会になった。
		普段からだについて深く考える機会がなかなかありません。良い機会だったと思います。
	子どもと共に もっと知りたい	今回のお話を子供と一緒に聞きたい。
		他の絵本も親子で読みたいと思っている。
		今回のお話を子どもと一緒に聞きたい。
	繰り返し教材 を使う	今回のお話を子どもと一緒に聞きたい。
自宅で何度もからだの絵本を子どもと読んでいる。		
	子どもと一緒にこの絵本をもっと読みたい。	

表7 親側の評価軸【からだへの仕組みの理解】に関するラベル化と生データの切片

カテゴリー化 (評価軸)	ラベル化	生データの切片化
からだの仕組 みの理解	臓器の働き の理解	小腸の働きなどは私も殆ど知らなかったの で、子どもに教えてもらい、母親も学 ぶことが出来た。 知らないからだの仕組みを子ども から教わった。

「今日はまだウンチが出ていないと気にする」「ウンチの色や形をよく見ている」から構成ができた。

【からだの大切さの理解】については、自分のからだを大切に
する 他人のからだも大切に
する の2ラベルから構成され(表5)、自分のからだを大切に
する は、「幼い子なりに知識を得ることで、自分の体を大切に
しようとする」から導き、他人のからだも大切に
する は、「暴力的な行動に対してからだの中の構造を知っ
てもらうことは小さい時代に伝えたい」という親の希望
のデータから導いた。

3. 親側のカテゴリー (評価指標) の抽出と命名までの プロセス

親側のカテゴリーとして、【からだへの興味・関心の
深まり】【からだの仕組みの理解】が挙げられた(表6,
7)。

【からだへの興味・関心の深まり】については、子
どもとからだの話を
する機会が増える 子どもと共に
もっと知りたい 繰り返し教材を使う というラベル
から構成された。子どもとからだの話を
する機会が増える については、「分かっていても子どもに説明する
機会がないので、良い機会になった」「苦手なものも栄
養になるからねと話すと、頑張って食べなくちゃと話し
ていた」「普段はからだについて深く考える機会がもて

ないので、良い機会になった」から抽出し、子どもと
共にもっと知りたい では、「今回のお話を子ども
と一緒にもっと聞きたい」「今回のお話を子どもと
一緒に読みたい」から抽出した。さらに 繰り返し
教材を使う では、「子どもと一緒にこの絵本をも
っと読みたい」「自宅で何度もからだの絵本を子どもと読
んでいる」から導いた。

【からだの仕組みの理解】では、「小腸などは私も知
らなかつたので、子どもに教えてもらい、親も学
ぶことができた」、知らないからだの仕組みを子ども
から教わった」から抽出した。

4. 本研究による OUTCOME モデルの作成 (図2)

本研究の対象となる「幼稚園・保育園年長児」と、間
接的に効果を得ると考えられる研究対象の「親」をZ
変数とした。幼稚園・保育園年長児と親の両方のZ
変数の評価項目として、「年齢」「性別」「家族構成」「病
気・入院の有無」「からだの仕組みの理解」「からだへの
興味・関心の程度」を設定し、さらに、幼稚園・保
育園年長児には「発達の程度」、親には「身体教育の
関心度」を追加した。それらに対応する測定用具は「
年齢」「性別」「家族構成」をそれぞれ間隔、名義、
比尺度の質問紙、幼稚園・保育園年長児の「発達の
程度」は、日本人乳幼児の発達測定に頻繁に使用さ
れ、信頼性・妥当性が得ら

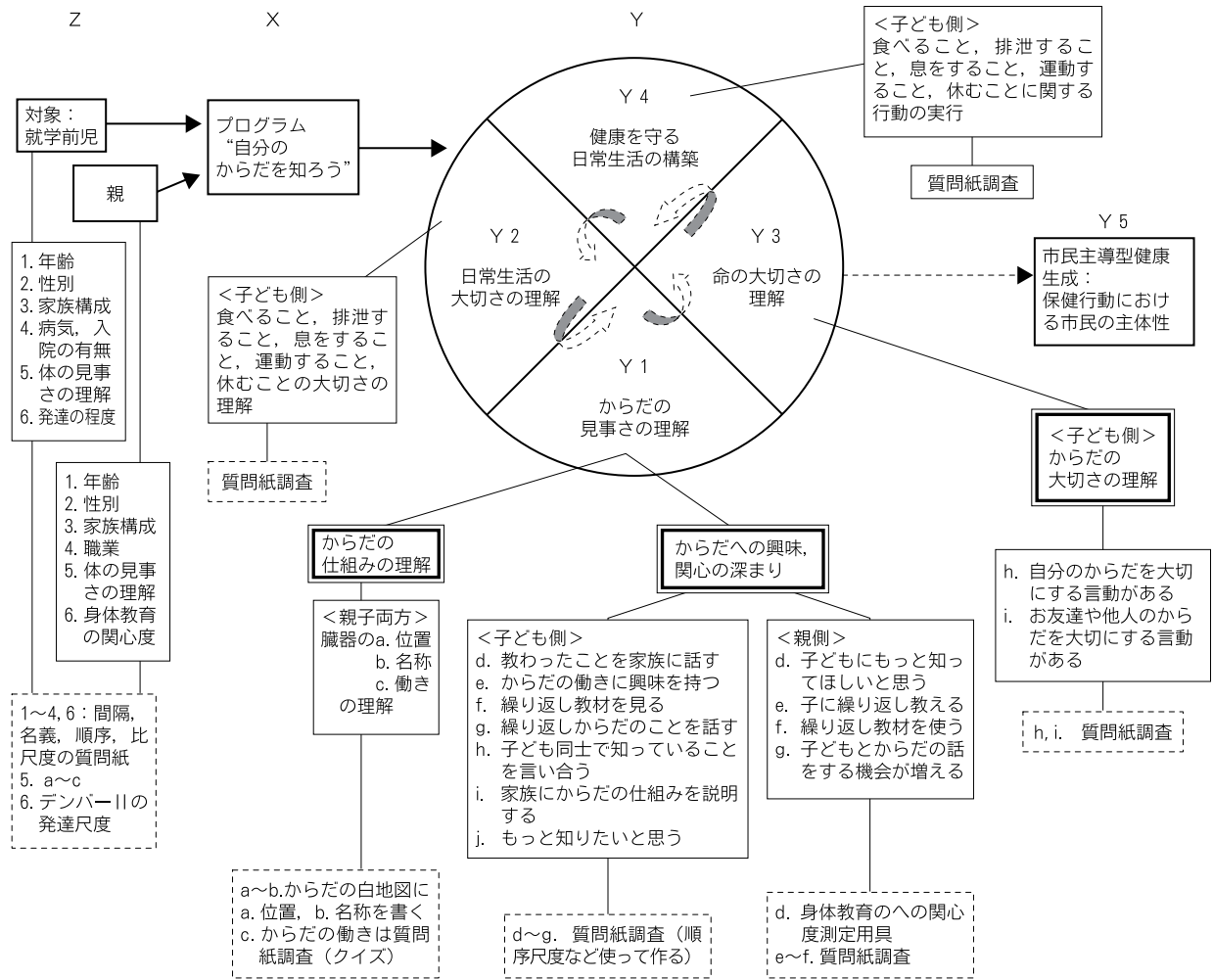


図2 就学前児向けのプログラム“自分のからだを知ろう” OUTCOME モデル

れているデンバーIIの発達尺度を適用した⁹⁾。“からの仕組みの理解”については、表1に記した本研究のラベル；臓器の名前，位置，動きが言える，理解できるを評価項目とし，測定用具は，幼稚園・保育園年長児とその親の両方に臓器の動きを答えるクイズ，からの白地図に臓器の名前や位置を記入するクイズを想定した。“からの興味・関心の程度”も，生データのラベルにある教わったことを家族に報告する，からの動きの見事さ，不思議さに興味を持つ，繰り返し教材を見る，繰り返しからのことを話す，子ども同士で知っていることを言い合う，家族にからの仕組みの理解を説明してくれる，もっと知りたいと思うを評価項目とし，それに関する質問紙調査を幼稚園・保育園年長児の測定用具とした。親については，子どもにもっと知ってほしいと思う，子どもに繰り返し教える，繰り返し教材を使う，子どもとからの話をする機会が増えるのラベルを評価項目とし，それに対応する質問紙調査を測定用具とした。

X変数は本研究の“自分のからだを知ろう”健康教育プログラム”であり，研究データから抽出されたカテゴリー；【からの仕組みの理解】【からの興味，関心の深まり】

心の深まり】【日常生活の大切さの理解】【健康を守る日常生活の構築】【からの大切さの理解】をY変数とした。

なかでも【日常生活の大切さの理解】【健康を守る日常生活の構築】は，仮説モデルで提示された項目と同じであったが，【からの仕組みの理解】【からの興味，関心の深まり】【からの大切さの理解】は仮説モデルにない内容となった。しかし，【からの仕組みの理解】【からの興味，関心の深まり】に関しては，“ドキドキって思うと，心臓がギュッとなるんだって”「食べたものがお腹の“ここ”でウンチに変身するんだ”「食べものがウンチに変化することが感動”「からだってすごい”などがデータにあり，からの仕組みの理解をしながら，からの見事さを感じ，からの興味や関心を深めていくのだと捉え，仮説モデルにある《からの見事さの理解》に合致し，【からの仕組みの理解】【からの興味，関心の深まり】のコアカテゴリーとして，《からの見事さの理解》が成り立つと判断した。

さらに，【日常生活の大切さの理解】のY変数は，食べるものの大切さの理解 排泄することの大切さ

の理解 の2ラベルが評価項目としてあがった。しかし、これは、プログラムの中の消化器系に焦点を当てて調査した内容から出たものであるため、OUTCOME モデルとするには、プログラム全体の OUTCOME を表現する必要がある。そのため消化器系以外の系統を含め、息をすること、運動すること、休むことの大切さの理解を追加し、評価項目とした。それに伴う測定用具は、質問紙調査を設定した。

【からだの大切さの理解】の Y 変数は、仮説モデルにはない変数であるが、【命の大切さの理解】という変数が仮説モデルには存在する。“からだの働きやつくりの見事さを感じることで、人のからだをむやみに殴ったり、乱暴に扱うことがなく、命を大切にすることにつながる”という解釈で【命の大切さの理解】が変数になっていることから、本研究から得られた【からだの大切さの理解】ができることで【命の大切さの理解】に結びついていくと考えられ、本研究の Y 変数として《命の大切さの理解》をコアカテゴリとして設定し、その下位のカテゴリとして【からだの大切さの理解】をあげた。評価項目としては、ラベルにある 自分のからだを大切にしている言動がある 友達や他人のからだを大切にしている言動がある を置き、それに関する質問紙調査を測定用具とした。

【健康を守る日常生活の構築】の Y 変数については、【日常生活の大切さの理解】と同様、食べることに關する行動の実行 排泄することに関する行動の実行といった消化器系に焦点を当てた内容のみラベルとして抽出されていたが、からだの全系統を網羅する内容にするため、息をすること、運動すること、休むことに関する行動の実行を追加し、評価項目とした。それに伴う測定用具は質問紙調査を設定した。

仮説モデルの最終的な Y 変数として示されている【市民主導の健康生成（医療における患者の主体性及び保健行動における市民の主体性）】であるが、本研究のデータからは、それらの内容は抽出されなかった。今回の OUTCOME モデルには、幼稚園・保育園年長児が成長した際の OUTCOME になると予想し、将来的な Y 変数として設定した。加えて、仮説モデルに示されている内容で、「からだの働き、つくりを知ることで、病気になったとき、異常を生じた臓器のことが分かり、その異常によって生じる症状を理解することができる。最終的には医療者が説明する治療法を理解した上で自分自身のことを選択し、主体的な療養生活を送れる」の部分は、本研究のデータにはなく、カテゴリとして抽出できなかった。仮説モデルで示していた上記内容は、研究対象の5～6歳児が、本プログラムを受けたことで将来的に習得していく内容である可能性も高いことから、今後の追研究で確認していく必要がある。しかし、今回作成する

本研究の OUTCOME モデルには含めず、研究データから抽出できた内容をモデルに適用することとした。

仮説モデルに示されている“からだの知識が増えれば、からだの見事さを理解し、さらに命の大切さを理解していく”は、積み上げ式に時期の違いで理解が進んでいるが、データから抽出したカテゴリでは、内容自体は仮説モデルと同様であるものの、時期がずれて生じるものではなく、同時期に抽出され、同時に生じているものであった。そのため、仮説モデルのように次から次へと理解が進む形態のモデルではなく、同じよう出現する形態の OUTCOME モデルを作成した。

VII. 考 察

プログラム実施後のアンケート内容をもとにカテゴリ化を行い、それを評価指標として OUTCOME モデルを作成した。OUTCOME モデルの Y 変数に提示した内容は、仮説モデルとほぼ同じ内容で、仮説モデルを本研究のデータでおおよそ支持できたといえる。しかし Y5 の変数である【市民主導の健康生成（医療における患者の主体性及び保健行動における市民の主体性）】、および「からだの働き、つくりを知ることで、病気になったとき、異常を生じた臓器のことが分かり、その異常によって生じる症状を理解することができる。最終的には医療者が説明する治療法を理解した上で自分自身のことを選択し、主体的な療養生活を送れる」の部分の内容は、本研究のデータから抽出されなかったことから、今後のコホート研究で確認していく必要がある。また、Y1～4 の変数は、仮説モデルのように時期をずらして積み上げ式に現れてくるものとは考えにくく、データから同時に抽出されていることから、同時期に現れる変数であると考えられる。各 Y 変数間がどのように関連しているかは、本研究のみでは不明確であるため、追研究でデータを増やし、共分散構造分析を用いて明らかにしていく必要がある。

さらに、Y 変数の【日常生活の大切さの理解】【健康を守る日常生活の構築】に対する評価項目は、本研究データからは消化器系に関する内容（食べること、排泄すること）しか抽出できず、息をすること、運動すること、休むことは、全系統を含めるために予測で挙げている。今後、全系統が含まれたプログラムを実施することで、消化器系以外の内容も確認することができる。子ども側しか抽出できなかった Y2～Y4 変数の評価項目についても、追研究のデータで親側を分析していくことが必要である。

仮説モデルでは示すことができなかった具体的な評価項目と測定用具を、本研究ではデータから抽出し、OUTCOME モデルに含めることができた。しかし、測

定用具については今後、再検討が必要である。5歳児の理解力や記憶力のレベルで測定でき信頼性や妥当性が得られている測定用具は未だ開発されておらず、参加観察法、母親や看護師等への質問紙調査やインタビューで評価しているものがほとんどである^{7), 8)}。幼稚園・保育園年長児は、文章も長く複文を言えるようになってきているが、同じ物を違う側面から見たり、違う言い方をされると違うものと捉える傾向がある^{9)~11)}。評価項目を正確に評価できる用具を設定するには、幼稚園・保育園年長児の成長発達、理解や記憶の構造を踏まえて、用具を開発していかなければならない。この件については、このプログラム“自分のからだを知ろう”の評価研究の大きな課題といえる。

幼稚園・保育園年長児向けのプログラム“自分のからだを知ろう”のOUTCOMEモデルを研究データから作成し、仮説モデルと比較し、変数の検討、下位項目・評価項目の抽出ができたことは今後の評価研究に繋がる重要な作業であった。しかし前述したようにOUTCOMEモデルに対する課題は多い。研究データを増やし、モデルの修正を重ね、事象に合ったモデルに今後精練していく必要がある。

VIII. 結 論

幼稚園・保育園年長児を対象としたプログラム“自分のからだを知ろう”の評価指標の検討と、OUTCOMEモデルの提示を行うため、消化器系の教育内容を実施し、実施後のアンケート内容をもとにカテゴリー化を行った。OUTCOMEモデルは、仮説モデルをおおよそ支持できる内容であったが、Y変数間の関係性、測定用具の選定などの課題も残った。今後、追研究でデータを増やし、事象に近づくモデルに精練していく必要がある。

本研究は、文部科学省21世紀COEプログラム聖路加看護大学「市民主導型の健康生成をめざす看護形成拠点」研究補助金で行ったものである。

引用文献

- 1) 菱沼典子他. (2006). 5歳児向けの「自分のからだを知ろう」プログラムの作製 - 市民主導の健康創りをめざした研究の過程 -. 聖路加看護学会誌, 32, 51 - 58.
- 2) 佐居由美他. (2007). 聖路加看護大学21世紀COEプログラム第7回国際駅伝シンポジウム 報告「子どもと学ぼう, からだのしくみ - あなたはどれくらいからだを知っていますか? -」 ~ 駅伝シンポジウムにみる People-centered Care の発展過程 ~. 聖路加看護学会誌, 33, 116 - 123.
- 3) 松谷美和子他. (2007). 5歳児向けの「自分のからだを知ろう」健康教育プログラム 消化器系の評価. 聖路加看護大学紀要, 33, 48 - 54.
- 4) 松谷美和子他. (2007). 保育園児を対象としたからだの仕組み (リンゴがウンチになるまで) を学ぶプログラムの実践報告. 保育と保健, 13(1), 86.
- 5) 岩辺京子他. (2006). 園児を対象とした「からだの仕組み」についての健康教育プログラム 消化器系の評価. 聖路加看護学会第12回学術大会講演集, 42.
- 6) 日本小児保健協会. (2003). デンバーⅡ発達測定法. 東京, 日本小児医事出版社.
- 7) 大池真樹. (2006). 手術に伴う短期入院中の体験に対する幼児の理解 幼児と母親に絵本によるオリエンテーションを実施して . 日本小児看護学会誌, 15(2), 61 - 67.
- 8) 川本哲哉他. (2006). 初めての手術を受ける幼児期・学童期の子どもに対するプリパレーション 絵本と人形を用いた方法と効果. 神奈川県立こども医療センター看護研究収録, 29, 29 - 34.
- 9) 佐藤朝美他. (2003). 発達理論に基づき子どもの理解2幼児期. 小児看護, 26(10), 1428 - 1436.
- 10) 前田明. (1977). 第3章3 記憶の発達. 安江良介, 幼児心理学講座2認知の発達 (第1版), 110 - 130, 東京, 日本文化科学社.
- 11) 落合正行. (1994). 5 幼児の記憶力. 藤永保, 講座幼児の生活と教育4 理解と表現の発達 (第2版), 98 - 174, 東京, 岩波書店.